第一章

第一章　プロローグ

目が覚めると、見知らぬ薄暗い街灯の下、冷たい風が吹き抜ける。

周囲を見回すと、見知らぬ町の風景が広がっていた。

隣の女性「ここは…どこ？」

と、隣にいた女性が驚いた声を上げる。

彼女は手を頭にあて、綺麗な黒髪を揺らしていた。

選択肢①「話しかける」

あなた「す、すみません、ここ、どこなんでしょうか」

女性「あなた、誰ですか」

あなた「僕は...」

あなた「...」

あなた「あれ...僕の名前..」

あなた「思い出せない...」

女性「あれ...私も...思い出せない...」

ふと全体を見ると、そこには50名ほどの高校生ぐらいの男女が倒れていた。

女性「って、みんなここで倒れてるけど…」

女性「私は…何をして…」

女性「あれ...思い出せない…」

女性「でも、言葉は分かる...」

周囲の混乱が一層深まる。

倒れている人たちも、次第に目を覚まし始め、同じように自分の名前を思い出せない様子だ。

選択肢②「話しかけない」

「おーいたいた」 その時、先輩冒険者が現れる。 彼の存在感は一瞬で周囲の注意を引きつけた。

彼はがっしりとした体格で、身長は190センチを超えている。

年齢は30代前半ぐらいだろうか装備は重厚な鎧で、凄まじいオーラを醸し出していた。

謎の男「今回はこれぐらいか,,,」

謎の男「お前ら、何でここに来たかわかるか？」

謎の男「分からねぇだろう。ここにきて15年になる俺もいまだに分からねぇ」

謎の男「来た時は名前も分からなかった」

謎の男「何も分からないお前たちに教えてやるよ。お前たちにこれから待ってるのは、地獄だ」

謎の男「この世界は、自分達で狩りをして、自分達で稼がなきゃならねぇ。強いやつが生きて、弱いやつが死ぬ世界」

謎の男「まぁ、そんな話をしにお前らを探しに来たわけじゃ～ない」

謎の男「毎年この時期になるとどこからかお前ら見たいなやつがここに発生するんだよ」 謎の男「結論からいうと、才能があるやつは、俺たちと一緒にこい」

すると、彼は右上にある「プロパティ」を指差す。

謎の男「プロパティってゆうのがお前たちの視界の右上にあるだろ」

謎の男「それを開いて最初の画面に見えるのがお前らのプロパティ、つまりステータスだ」

隣の女性「プロパティ」

隣の女性「本当、レベル1,HP30 MP15、それにスキルまで」

謎の男「そうだ、その情報が今のお前たちの状態を示している。レベルやHP、MP、スキルは、生きていく上で非常に重要」

謎の男「まぁ、ステータスを見なくても、ある程度の熟練度までくると、そいつの持ってるオーラで素質や素量を判断することができるようになるんだ」

その後、謎の男は数秒辺りを見渡すと、2名を指さした。

「おい、そこの銀髪と、隅で座ってる金髪の女、俺たちとこい」 すると、ガタイの良い銀髪の男と金髪ロングの女性は無言でジョージの方へ歩いて行った。

「お前たち、名前は？」

「俺はハイトスだ、私はリーナよ」

謎の男「さすがだ、もうプロパティから名前をつけているようだな」

謎の男「俺はジョーラだ、お前たちはスカウトするからついてこい」

するとジョーラだと名乗った謎の男は全体に向けて言葉を放つ。

謎の男「これから、他の先輩冒険者たちもお前らの事を視察に来るだろう。そこでスカウトされれば生き残る確率があるが、スカウトされなければ自分達でパーティーを組むしかない。つまり、何も教えられずに生きなきゃいけない。生き残る確率はぐんと下がるってわけだ」

謎の男「ま、其れでも生き残りたいってやつは北西の冒険者ギルドへいくといい」

謎の男「ハイトス、リーナ、いくぞ。」

画像がフェードアウト

時が経つにつれ、村の広場には次々と先輩冒険者たちが集まってきた。

重厚な鎧を身にまとった男や、長い髪をなびかせた弓を持つ男、杖をもつ軽やかな装束の女性冒険者などが、めぼしい人材に声をかけていた。

だが、俺が話しかけられることはなかった。

一通りの時が経つと、辺りには余りものだけが残っていた。

あなた「くそ、なんで、俺には才能がないのか」

あなた「プロパティ」

スキル一覧を表示

あなた「レベル1,HP15,MP5」

あなた「スキル　無」

あなた「加護「助ける者」?」

あなた「意味が分からない。「助ける者」って誰かを助けるのか？」

隣の女性「ねぇ、君」

いきなり隣の女性「が話しかけてきた」

隣の女性「君、スカウトされなかったの？」

隣の女性「私はさっき、杖を持った女の人にスカウトされたよ」

あなた「あ、あはは笑、僕には才能がないみたいで」

隣の女性「きみ、隣にいたから話しかけたけど良いやつそうだからすぐパーティー見つかるよ笑」隣の女性「私もういくね。じゃあまたどこかで」

あなた「う、うん。頑張って笑」

あなた「はぁ。さっきの女の子どころか回りもみんなどこかへ行ったみたいだし、俺ももうそろそろ動かないとな」

時は流れ、俺は北西に位置する冒険者ギルドへと足を運んだ。

第二章　ギルド

周囲を見渡すと、賑やかな雰囲気が漂っている。

人々が集まり、笑い声や話し声が交錯する中、俺はギルドの入口を探し回った。街の中心に位置するこの場所は、冒険者たちの集う社交場であり、様々な人々が行き交っている。すると、ギルドと書かれた看板が見つかった。

「ずいぶん色々探し回ったけど、やっと見つけたぞ。ここが、ギルド…だよな。」

心の中で自分に言い聞かせながら、ギルドの扉を開ける。

目の前には屈強な男たちや女たちが酒を酌み交わし、楽しげに談笑している光景が広がっていた。

あなた「

あなた「すみません。冒険者になりたいんですが。」

すると、受付嬢が優しい笑顔で答えた。

受付嬢「こんにちは！あのー、冒険者ギルドの登録は1人ではできませんよ。必ず3人以上のメンバーを集めてくださいね。」

な、なんだって！そんなことは聞いていないぞ。

周りを見渡しても、他にパーティーを組んでくれる人なんて見当たらない。

その時、受付嬢が言葉を発する。

受付嬢「もし、パーティーメンバーを探したいのなら、ギルドのパーティーメンバー募集のボードを見ると良いですよ。自分でも書けますし、パーティーメンバーが見つかるかもしれないですよ」

あなた「本当ですか？ありがとうございます！見てみます」

僕は早速ボードを見に行く。

あなた「よし、早速ボードを見てみよう！」

中級クエスト「失われた遺跡」探索メンバー募集

内容: 古代の遺跡が発見され、その中に眠る秘宝を探し出す依頼です。しかし、遺跡には罠やモンスターが待ち受けています。

条件: Lv25以上、スキル持ち

上級クエスト「狂気の丘の魔女」討伐メンバー募集　難度★★★★★☆

内容: 狂気の丘に住む魔女が、周辺の村々に不幸の魔法をかけているという情報があります。討伐メンバー募集です。

条件: Lv40以上　上級職のみ

上級クエスト「力の泉」攻略メンバー募集　上級職Lv50以上　難度★★★★★★

内容: 圧倒的な力を持つ古龍の討伐

条件: 討伐試験合格者

あなた「むりだ…初心者でもパーティーメンバーになれそうな募集が一個もない…」

あなた「どうすれば…」

そのとき、ふと右下に目をやると、きれいな字でパーティーメンバー募集の紙が貼られていた。

パーティーメンバー募集要項。

最近、パーティーを脱退させられちゃって、ちょっと黄昏れてるところです…泣

もしよかったら、一緒にパーティーを組んでくれませんか？

北西のベンチで待ってます(^^

あなた「おぉー！こ、これは、自分でも仲間になってくれそうな募集要項だ！」

すぐにいこう

第三章　北西のベンチ

北西のベンチまで探索。何とか北西のベンチへたどり着く。

**あなた:** （心の中で）ここが、北西のベンチか…

（目の前に、見覚えのある女の子が座っていた）

**隣の女:** （驚いた表情で）あ、君、あのときの！

**あなた:** （少し驚きながら）君は！確か、先輩たちにスカウトされて、その人たちとパーティーを組んだんじゃなかったのか？

**隣の女:** うん、そうだったんだけど…入ったはいいものの、あのパーティー、すっごく険悪なムードでさ。ずっとここに居るって考えたら嫌になって、抜けてきちゃった（笑）。

**あなた:** そうなのか、でも何でこんなところで座ってるのさ？

**隣の女:** 私あのあと、ギルドに行ったら、2人以上必要って言われて、ちょっと困ってて、」

隣の女「パーティーメンバーになってくれそうな人を探してたらこんなところまできちゃってたみたい笑」

**あなた:** じゃあ、あの張り紙を書いたのも君だったの？

**隣の女:** （首をかしげて）あれって？

**あなた:** 「一緒にパーティーを組んでくれませんか？北西のベンチで待ってます(^^)」っていうやつ。」

**隣の女:** （笑いながら）え？それ私じゃないよ！でも、面白いね。」

**あなた:** でも、君はパーティメンバーを募集してるんだよね？

**隣の女:** （少し照れながら）え？う、うん。そう。

**あなた:** じゃあ、僕と一緒にパーティーメンバーになってよ！一緒に冒険しよう。

**隣の女:** え？いいの？。

あなた：僕もパーティーメンバー探してたから！あの張り紙みてここに来たんだし

隣の女：その張り紙の事はよくわからないけど、ここに座っててよかったわ( ´艸｀)

隣の女「これからよろしくね！」

隣の女「そういえば名前はなんていうの？」

あなた「なまえ？」

あなた「名前は、僕は思い出せないんだよね」

隣の女「ちがうよ、プロパティから名前つけられるの。噴水の近くにいたおじさんも言ってたじゃない」

あなた「え？そうなの？？」

隣の女「プロパティでみてみてよ」

あなた「プロパティ」

画面を切り替える。

名前「未設定」

名前を登録します。

名前を○○に登録しました。

ステータス　○○

レベル１

ＨＰ15

ＭＰ５

加護「助ける者」

○○「名前登録したよ！俺の名前はこれから○○だ。よろしく！」

レナ「○○ね！私はレナ！よろしくね！」

レナが仲間になった。

4章　星のかけら

第五章：スライムとの遭遇

場面：北西のベンチからギルドへ向かう道中

主人公（○○）とレナは、ギルドへ向かう途中、静かな森の中を歩いている。

突然、周囲から不気味な音が聞こえてくる。

あなた「そういえば、俺たちってなんで気づいたらこの世界に来てたんだろう」

レナ「そうね。私達って本当は死んでるのかもね」

あなた「あはは、だから記憶を持ってないって？言えてるかもしれないね」

レナ:「まって。なにか、変な音がする」

すると、草むらからスライムが現れる。

レナ「スライムだわ、どこから入ってきたのかしら」

レナ「被害が出る前に、倒しましょう」

その瞬間、数匹のスライムが現れ、二人に向かって飛びかかってくる。

戦闘開始：

二人は武器を構え、スライムたちに立ち向かう。

戦闘終了：3ターンぐらいで倒せる。

自分が攻撃して、相手も攻撃して、もう一回自分が攻撃して、

これを2回繰り返して、だいたいの操作を行う。

戦闘シーン終了後

レナ 「スキル！ファイアアロー！」

火の矢がスライムに命中し、スライムは消滅する。

レナ「なんとか倒せたみたい」

あなた「いや～、君、もうスキル使えるんだね。すごいや」

レナ「そうね、なぜか、自然と使えるのよね」

レナ「ねぇ、あれ見て」

すると、倒したスライムの場所で何かが光っているのに気づく。

あなた 「あれは…宝石？？」

二人は近づき、スライムが持っていた宝石のかけらを手に取る。

あなた「これって...お金かな？」

レナ「でも、モンスターを倒したときに自動的に割り振られていたはずよ」

レナ「モンスターがまれに落とすドロップアイテムみたいなものかしら」

レナ「ギルドに行って鑑定してもらいましょ」

二人はギルドへと向かった。

第六章：ギルドの騒動

ギルドに到着すると、周囲は騒がしい。人々のざわめきが耳に入る。

冒険者たちが集まり、何やら熱心に話し合っている様子だ。

○○はレナと顔を見合わせ、何が起こっているのか気になった。

あなた「どうしたんだろう？」

レナ「わからないけど、とにかく中へ入ってみよう」

ギルドの中に足を踏み入れると、冒険者たちの興奮が一層高まっているのが感じられた。

彼らの視線は、一人の男へ集中している

俺たちはその方向に歩み寄り、耳を傾ける。

しがない冒険者「やった、やったぞ！！俺も星のかけらを手に入れた！！」

しがない冒険者「これで2つ目だ」

しがない冒険者「こいつがあと1つありゃあ、俺はこんな世界から抜け出せる！！」

しがない冒険者「俺は願いをかなえるんだ！」

レナ「ねぇ。あの男が持ってるもの、さっき私達が手に取ったものに似てない？」

あなた「確かに」

しがない冒険者（星のかけらを見つめながら）「こいつがあと1つありゃあ、俺はこんな世界から抜け出せるんだ！！

（少し興奮気味に）このかけらは、ルチル様が与えてくれた救済の証だ。元の世界に戻るための鍵だ」

しがない冒険者（独り言を続ける）この世界に来てから、もう何年も経った。最初は冒険者としての夢を抱いていたけど、いつの間にかただのしがない冒険者になっちまった。」

しがない冒険者「でも、俺は残り1つ。なにをしてでもあとひとつ手に入れてやる」

しがない冒険者「どこで手に入れたかって？それを聞くのは野暮ってもんだろう？」

レナ「あの男にこのかけらを持ってるのが知れたらやばそうね」

あなた「え？なんで」

レナ「あの男、服装から見て暗殺系よ、前にいたパーティーから教えてもらったけど、暗殺系には近づかない方が良いわ、何されるか分からないもの」

あなた「そうなんだ」

レナ「あの男はほっといて、私たちはギルド登録済ませましょ」

あなた「そうだね」

6章　森

7章　森深部

8章　謎の女性

9章　帰還

10章　新しい仲間

11章　襲撃

12章　ハイトスとリーナ

13章　力の泉

14章

めっちゃ強い敵が町を襲撃

そんなときに、レベルアップしたハイトすとリーリエがエリート集団と一緒にそいつらを一掃

力の差を見せつけられた俺たちは、理由を探った結果、力の泉という所に行って竜の血を飲むことが条件だと言われてそこに行くことにする

んで、その為には、より強い人材、タンクとヒーラーが必要だってことで、

仲間集めをしてから力の泉に行く

んで、力の泉まで行って、皆が竜にやられて木津付いて、ギリギリのところで、フリーナが、ありがとうって言って死ぬ

僕たちは傷だらけの体で、フリーナの遺体を協会に店に行く。

すると協会の主は、君たち、この娘、人間じゃない。フェアリーだ。

フェアリーは希少性が高く、めったに人前にめったに人前に出ないんだが、

この子は、君たちを助けたいと思っていたのかのぉ

フェアリーは感情が無く質素じゃが、とっても優しい種族じゃからのぉ。

皆が大泣きする

この子、救いたいか？

え、、

その言葉に一瞬頭が真っ白になる

すくいたい。

ならば、眷属になるほかない。

眷属？

あぁ、この子の血を飲め。

そうすれば眷属になれる。

この子は生き返る。

ありきたりかなー、

まぁいいか、

フリーナ、お帰り泣

また、やっていこう。

END

その後、眷属使いの冒険者と呼ばれるようになった。